

は し が き

新入生向けの法学入門書には、法の基本的概念のそれぞれの意味や、それら相互間の関連について概説するようなものが多い。多様な社会問題に関心を持ち、正義の実現を目指して法学部に入学した学生にとって、そこで出逢う法学は、ともすれば、社会の現実とは距離を置いた無味乾燥な概念の理解に終始しているような印象を与えてしまう。

実際には、難解な法概念や、その時として文言の辞書的な意味とは大きく隔たったような解釈は、現実の社会や人間の行為をめぐる積み重ねられてきた知見の反映であり、決してただ単に抽象的概念構造としてのみ存在しているわけではない。そこには複雑で一筋縄ではいかない社会や人間との相互関係が内包されている。

しかし、そのことに自力で気づくためには、法概念についての十分な学習やその咀嚼と、社会における法の機能や役割についての理解が必須の前提となる。それは一朝一夕にできることではない。

そこで、新入生に対して、法の基本的概念の概説書ではなく、社会のなかで実際に発生する出来事との関係で、法がどのような意味を持っているのか、どのような機能を果たしているのかを、直感的に感じ取れるような教材を提供してみようというのが本書のねらいである。まずは具体的な事件に着目し、その後に、それに法がどう関わっているのかを見ていくなかで、法を学ぶことの意義やおもしろさに気づくことができるのではないかと考えている。

最初の入門書として手頃なだけでなく、その後の憲法、民法、刑法等の実定法諸科目のより専門的な学習を進めていくなかで、法と現実との関係を見失いそうになったとき、改めて振り返ってもらえるようなテキストになっているのではないかと自負している。もとより体系性には欠けているが、読者それぞれの社会的関心と法を結びつける、まず第一に手に入るべきテキストであることを目指した。

各項目は、出来事、事件の叙述から始まり、そこに関わる法的問題の説明、項目によっては、事件のその後の状況などのパートで構成される。また、そのなかに出てくるキーワードについては、別途、短い解説を付し、コーヒープレーク  のようなコラムもところどころに挿入されている。

この本を手にとったら、どこからでもいい、自分が興味を引かれたトピック、事件から、読み進めてほしい。トピックは、社会的にも問題になった事件を中心に構成され、法が社会と最も躍動的に関わる場面を、そこから読み取ることができるはずである。いずれのトピックでも、そこから法が社会に与える影響や、法の社会への対応の柔軟性、法によって社会を規律することの難しさ、そしてさらには、法が本来的に社会の産物であること等を感じ取って欲しい。そして、その後、実定法諸科目の学習を進めていくなかで、しばしば、この本に立ち返り、その科目に関わるトピックを再読することで、一見、無味乾燥に見える法概念の背景に広がる、法と社会とのダイナミックな関わりを再確認して欲しい。

本書が、読者が法の持つ躍動性を理解したうえで、その後の法の学習をスムーズに、また批判的視野をもって進めていくための一助となるならば幸いである。

なお、本書の作成に際しては、企画の段階から完成に至るまで、法律文化社編集部の梶原有美子さんにたいへんお世話になった。多数の執筆者が参画する本書のような企画を完遂することは、編者2名の力だけではまったく不可能であった。こうして本書を読者の皆さんに届けることができたのは、ひとえに梶原さんのご尽力のおかげである。

編 著 阿部昌樹
 和田仁孝